

## 「憲法九条は日本側の要請から生まれた」 2016年06月18日

上記をタイトルにした私の投書が『週刊金曜日』の1092号の「論争」欄に掲載された。

改憲論者は戦争放棄と武器不保持を謳う第九条を改定し、「戦争のできる国」にして「国民」の命と平和を守ると主張している。憲法はGHQ（連合軍最高司令官総司令部）やダグラス＝マッカーサー（連合軍最高司令官）に押し付けられたもの、という見方が主流だ。ゆえに“戦後レジーム”からの脱却をするため、日本人の手で新しい憲法を作る（現在の憲法を改定する）べきであるという。

本当にそうだろうか。本誌（2014年9月19日号）において、「憲法九条を作ったのは誰なのか 幣原喜重郎元総理への最後のインタビューを読む」と題する伊藤成彦氏（文芸評論家）の記事が掲載された。最近は月刊誌『世界』（岩波書店・5月号）でも「憲法九条と幣原喜重郎」と題する堀尾輝久氏の論文が掲載されている。結論から言えば、九条は戦後首相を務めた幣原喜重郎の提案であったということである。

内閣の憲法調査会の会長を務めた高柳賢三氏は、マッカーサーに「幣原首相は、新憲法起草の際に戦争と武力の保持を禁止する条文をいれるように提案しましたか。それとも、首相は、このような考えを単に日本の将来の政策として貴下に伝え、貴下が日本政府に対して、このような考えを憲法に入れるよう勧告されたのですか」と短刀直入に質問をした。するとマッカーサーは、「戦争を禁止する条項を憲法に入れるようにという提案は、幣原首相が行ったのです。（中略）わたくしを感動させました」と明快に返答したという。米国上院軍事外交合同委員会で証言され文書も残っており、信憑性は高い。

マッカーサーはフィリピンから撤退するとき「I shall return（必ず、戻って来る）」と言い、事実、戻って来て、連合軍を勝利に導いた。朝鮮戦争で膠着状態になったときは原爆の投下を米政府に要望している。職業軍人の彼には戦争放棄や武器不保持の理念など、頭の片隅にもなかったであろう。幣原の提案に驚き、「12歳の子どものように」感動し、九条を明記した。そう理解すると納得がいく。

現在の国際政治において、各国の首脳たちは自分の国がいかにか豊かで強い国であるかを主張し、グローバリズムと真逆なナショナリズムが吹き荒れている。首脳たちは相手国を陥れ、自国の繁栄構築に懸命である。イソップ童話の、お腹を膨らませ、大きいだろうと力むカエルのように見える。それは「子どものように」肩を怒らせ、ケンカしている姿である。だが私は、同じ「子どものように」なるならば、平和、共生に感動する「子ども」になりたい。

九条はアジア・太平洋戦争の大きな悲劇を経て、平和への思いを結実させた日本人からの、アジアの人々への謝罪のメッセージでもあった。地球時代に相応しい平和哲学として、「子どものように」感動し、平和を実現する世界憲章にしていこうではないか。

海外でイスラエル関係の施設に行くと、テロ防止のためであろうか、異常な警戒をしている。イスラエルは相当な悪事をしているのだろうと思わされた。サミットの警戒態勢は虫一匹通させないほどである。よほど、テロの標的にされているようだ。演出は派手で、暴力団の組長会議のように見える。サミットは自由と民主主義を共通価値としている先進諸国の会議と言われているが、内実は自分たちの国々の利益を守るための話し合いであろう。価値を異にする国々を交えた会議になる時、真の「大人の会議」になる。大親分の顔色を見て動く世界から、国連を中心にした共生の歴史の展望を見据えた世界になってほしいと思う。